

# カンボジアで、今、光っている人材育成

大村 次郷

重なり合うように埋められた仏像群から「千体仏」が宙に浮いたときは、おもわず手をたたいた。約八〇〇年のねむりから覚めた遺物は優に四五〇キロはある。それをとり上げたのは日本人の学徒ではなく、上智大学が育ててきた現地の考古、建築、石工の人たちだった。

今、カンボジアでは日本人による人材育成が目にとまる。ひとつはこの上智大学のプロジェクトと、もうひとつは京都出身の染色家、森本喜久男氏が始めた伝統織物の再興である。(どちらも腰をすえた仕事だ。それらは内戸で失われた技術、知識取得などに重きを置く。)

考古学はややもすると資金を出す関係者への成果に期待をし、地元の人たちには益にならないことが多い。上智大学は発掘する現地の人たちを育て、彼らに振らせて、それを調査、修復、そして保護することを学ばせてきた。日本に招いた人たちもかかるく一人の人をこえている。

その過渡期に、神が配剤したとしか思えない二七四体の魔仏発見にびつかつたのだ。「千体仏」もアンコールの考古学の発掘史上画期的な出土物であったが、表面が浮いていて、網のかけ方を間違うと壊れる状況であった。難しい出土物をいためずに彼ら自身の

手でとり上げたのは、上智大学が意図したこと実を結んだ結果である。

また染色家の森本氏の工房をシムレアップ川沿いにたずねると、糸をつむぐ人たち、織る人たちのまわりには乳飲み児がたくさんいた。女性たちの数はおよそ五〇〇人。この町で子どもを連れて働ける、唯一の職場である。その彼女たちが織っている絹は、内乱でほとんどなくなっていた。

この絹はマユ玉からわすか二〇〇メートルしか引き出せない生糸で織られるものだが、森本氏はこの再興に力を入れたのだ。その染料も、この国が古来よりやってきたとおりに草木をつかうことにして徹した。日本などからは何とも込まれなかつた。彼女たちが染料となる草木を庭に植え、それを買い上げるシステムまで作り上げている。赤い染料となるラックカイガラ虫は今、この国にはいない。それを放虫する森を作ろうと、彼はそころみでいる。

このプロジェクトにスイスの時計メーカー(ローランクス)が賞を出したのは、他ならぬ戦いで未亡人になつた人たち、働きたい人たちに希望を与えたからだ。老婆の手のなかに残された織物の世界が、次世代に受けがれしていく。

おおむら つぐさと／1941年、旧満州生まれ。写真家。アジアを中心に世界各地のフォト・ルポルタージュを手がける。NHKのドキュメンタリー番組「新シリクロード」ほかのスチールを担当。1999年、大同生命地域研究特別賞受賞。おもな著書に『道跡が語るアジア』(中公新書)『アジアをゆく』全7巻(集英社)などがある。



## 目次

MAY 2006 月刊みんぱく 5

- 01 エッセイ 世界へ世界から  
カンボジアで、今、光っている  
人材育成 大村 次郷

- 02 特集 遊ぶ  
遊びと仕事の遠近 南 真人  
遊びを楽しむ豊長類 早木 仁成  
遊びながら働く人びと 名本 光男

### 伝承される彦根の力口ム 杉原 正樹

中国の都市化と泥んこ遊び 高 茜

トルコのカフヴァニ集まって  
キャミル・トラマオール

- 08 未来へひらくミュージアム  
展示室―情報の行き交う場 布谷 知夫

- 11 表紙モノ語り  
4000年をつらぬくインドのチェス 小西 正捷

- 12 みんぱくインフォメーション

- 14 万国津々浦々  
チエルノヴィツツのラビ 赤尾 光春

- 15 時論・新論・理想論  
テレビ番組のなかのヴァヌアツ 白川 千尋

- 16 外国人として生きる  
国勢調査と二人の外国人  
アンジェロ・イシ

- 18 地球を集める  
ジョージ・ブラウン・コレクション  
その価値が輝くとき  
石森 秀三

- 20 生きもの博物誌  
ふるさとの味は、毒の味?  
阿良田 麻里子

- 22 フィールドで考える  
タイのうたげと選挙  
高城 素

- 24 研究公演  
「ホワイト・カ力トウ来日公演」  
次号予告・編集後記